

悠久の京を訪ねて Part II Vol.5



京は古より人々が集い、その気候・風土の中、人々の生活が営まれてきました。

京都府内の遺跡で多数発掘された出土物により縄文、弥生時代までさかのぼり、当時の様子を知ることができます。

私たちが住んでいる地域にはどのような歴史があったのか、出土した資料を基に過去の文化やその発祥の歴史を訪ねましょう。

『古の巫女』

■ 巫女とは

巫女さんは、現代社会では神社において神事の奉仕をおこなったり、神職を補佐する仕事をしていますが、古代の巫女は神や霊のこトバを伝える役割を担っていました。平安時代初期に編纂された『続日本紀』にも、「みくひこ神子」と記されています。

■ 塩谷1号墳の巫女形埴輪(京都府指定文化財)

平成元年に京丹波町塩谷1号墳の発掘調査が行われ、女性の姿の埴輪が出土しました。両手で器(欠損)を捧げる姿



巫女形埴輪

京都府京丹波町



や表情やしぐさなどをみると、非常に魅力的な女性像です。髪形や衣装から祭祀に従事する巫女を象ったと考えられてきたのですが、最近の説をご紹介します。

■ 巫女の髪形と衣装

お相撲さんのまげは上から見た形で「大いちょう」と言いますが、女子埴輪の髪形は、分銅もしくは砂時計の形に見えます。まげ髪を後ろで束ねた後、折り返して毛先を包み込み、中央で縛って両端を開いたものです。これは江戸時代以来の日本髪のの代名詞「島田」と類似したもので「古墳島田」と呼ばれていて、女性の姿を造形した埴輪一般に見られます。

衣装は、長袖のシャツとスカートの上に、幅広の布を斜めに巻いて肩で2つの隅を結び、最後に帯と襷たすきをつけるものです。この幅広の布については、古代の歴史書にある神官の衣装である「意須比おすひ」とされてきましたが、最近では肩布と呼ばれる膳夫かむろや采女うはめが貴人に給仕する時に上にはおる着物のの一種とする考えもあり、それが当時の巫女の制服になったと考えることもできます。